

みんなの本

放射能難民から  
生活圏再生へ

中原聖乃  
Shizuko Nakano



法律文化社

放射能難民から生活圏再生へ

複雑な現実を目を

— 中原 聖乃さん著

一九五四年三月、ピ

キニ環礁で米国の水爆  
「ブラボー」の実験が  
行われた。

二百キロ余り離れたロ  
ンゲラップでも強烈な  
光の後、すさまじい爆  
風に見舞われた。数時  
間後から降り始めた放  
射性降下物により、人  
体、環境への影響がみ  
られたという。被ばく  
した人々は、現在もな  
お故郷を離れて集団生

活を送る。

約十五年、現地に溶  
け込みながら調査・研  
究をしてきた中京大特  
任研究員の中原さんが  
日常に焦点を当て、生  
活圏復興の軌跡をたど  
る。「放射能汚染問題  
は、ともすれば除染の  
仕方や健康被害などの  
放射能リスクという視  
点からのみ語られるこ  
とが多い。しかし放射  
能汚染地域居住者は、

放射能リスクだけでは  
なく、コミュニティ  
離散のリスクも抱えて  
いる。放射能汚染問題  
の複雑な現実を目を向  
けてほしい」と話す。

A5判、174ページ、  
2520円。京都市北  
区上賀茂岩ヶ垣内町  
71、法律文化社 電 0  
75(791)713  
1 発行。



「ご飯食べてっつー」。南太平洋に浮かぶマーシャル諸島を歩いていると、ときおり声がかかる。新鮮なココヤシジュースはのどを潤し、魚はおなかを満たす。

マーシャル諸島はドイツ、日本、米国の統治を経て、一九八六年に独立した人口五万人あまりの島国。千二百の島々を合わせても山手線の内側の三分の一ほどの面積しかない。サンゴの国土は生物多様性に乏しく、自然災害に弱い。

気さくなあいさつの裏には、そんな島で生き抜くために分かち合い、つながり合う文化が隠れている。

つながりは自然災害による危機を救ってきたし、今も自給自足の暮らしを支える。このつながりの文化を揺るがしたのが、米国の核実験だ。

一九四六年から五八年にかけて、米国はマーシャル諸島で六十七回もの核実験を繰り返した。静岡・焼津の第五福竜丸などが被ばくしたビキニ環礁での水爆実験(五四年)で



中原聖乃

やがんなどの健康被害が続出したため、八五年に再び避難し、それからはロンゲラップの「仮の島」での避難生活を続ける。仮の島は、故郷から二十キロ以南にある、かつての無人島だ。

は、爆心地から二百キロ離れたロンゲラップ環礁でも、多くの住民が急性放射線障害を発症して救出された。住民は三年後にいったん故郷へ帰還したが、その後も出産異常

ロンゲラップ地方政府は、故郷の除染を進めた上でインフラを整備し、住民を一齐に帰還させるプロジェクトを進めてきた。米国の調査では、除染後の居住によるセシウム

137の内部被ばく量は最大年間〇・〇四ミリシーベルトとされる。その通りなら帰還してもよさそうなのに、除染から十五年が過ぎた今も進まない。放射能への不安や、安全をうたう米国政府への不信感が背景にあるが、それだけではない。時とともに住民たちに仮の島への愛着が芽生えたのである。故郷を思い起こさせるタコノキやココヤシを何年もかけて植林し、タコノキ羊糞など伝統食の生産も始めた。仮の島は今や第一の故郷になりつつある。

のは、そうした目先の利益追求ではない。低線量の放射能汚染は影響がはつきりせず、画一的な方針を貫くことにはリスクが伴う。一斉帰還の後で、万一人の健康に影響が出れば、また避難を迫られる可能性がある。住民の選択に呼応する臨機応変な政策変更は現実的であり、合理的でもある。

# 「放射能なし」の枕詞が消える日

## 核実験の島にみる福島未来

こうした変化を受けて、帰還は新たな局面を迎えている。地方政府は故郷への一斉帰還にこだわらず、仮の島を残すことも視野に入れ始めた。一方で、米国へ追加除染を要求しつつ、帰還にむけたエコツーリズムや真珠養殖による故郷の産業振興は継続する。すでに男性数人が単身働いている。さらには、被ばく地との姉妹都市提携、世界遺産登録なども模索している。政府は、過去に先進国の高レベル放射性廃棄物受け入れを検討したこともあるが、今、視野に入れている

汚染地で暮らすことが、加害責任の追及を弱めるといって批判もあるだろう。しかし、被害者は自らの判断で幸福を追求する権利がある。加害責任追及と、個々の幸福追求は別個に捉えるべきだろう。

故郷に戻るか、新天地で生活を再建するか。ロンゲラップで起きていることは、まさに福島にも当てはまる。仕事のため福島に留まる父と県外に避難する母子の二重生活は、健康被害を避けるための自主的な動きだ。福島の子供の短期避難を受け入れる活動、有機農業による再生、放射能汚染地域の観光地化計画など、さまざま取り組みも出始めた。こうした動きを行政は適切に支援すべきだ。



二月に郡山の友人を訪ねた折、缶詰をいただいた。採った山菜を工場で缶詰にして、親戚や知人に配るしきたりだという。福島もマーシャル諸島同様、都会にはないつながりが暮らしを支えていることに気付かされた。私を安心させるためか、友人は「放射能、入ってないから」と言い添えた。その枕詞がいらなくなったとき、真の復興が遂げられると思った。

(なかほら・さとえ) 中京大社会科学研究所特任研究員。近著に『放射能難民から生活圏再生へ』